



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期マルクスにおける階級概念の形成に関するノート：「階級」と「身分」との区別を中心として
Author(s)	朝岡, 幸彦
Citation	社会教育研究, 6, 37-44
Issue Date	1985-09
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28446">https://hdl.handle.net/2115/28446</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P37-44.pdf



# 初期マルクスにおける 階級概念の形成に関するノート —「階級」と「身分」との 区別を中心として—

朝 岡 幸 彦

## 1.

「階級」を最も包括的に定義したものととして、レーニンの次の箇所がしばしば引用されている。<sup>(1)</sup>「階級と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその地位が、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され文化されている）が、社会的労働組織のなかでの役割が、したがって、彼らが自由にしうる社会的富の分け前をうけとる方法と分け前の大きさが、他とちがう人々の大きな集団である。階級とは、一定の社会経済制度のなかで占めるその地位がちがうことによって、そのうちの一方が他方の労働をわがものとするができるような、人間の集団を言うのである。」（レーニン『偉大な創意』、全集第29巻 p.425）つまり、階級とは「人間の集団」であり、物を媒介にしつつも人と人との関係に他ならない。しかし、ここに言う「人間」は抽象的な人間ではなく、あくまでも歴史的に規定された社会的生産の担い手としての生身の人間であり、その限りでまた個性的な人間である。この個性をもった人間を、「個人」とも呼びうるであろう。史的唯物論の基本的な諸概念のなかでも、とりわけ「階級」および「階級闘争」の概念に非難や攻撃が集中するひとつの理由は、まさにこの「個人」を包摂する階級概念があまりに形式的に理解されているためではないだろうか。

その意味で、個人の「階級」への包摂を個人の「身分」への包摂との対比の中でとらえるという視点からは、階級概念をより豊かなものとして理解するひとつの糸口となるのではないかと考える。この点に関して、すでにマルクスは1851年の草稿の中で、次のような指摘を残している。「身分において、個人の享受、その質的転換は、かれが包摂されている特定の分業に依存している。階級においては、〔それは〕かれが領有できる一般的交換手段に〔依存している〕だけである。はじめの場合には、個人は社会的に制限された主体として、かれの社会的地位によって制限された交換に入る。第二の場合において、〔個人は〕一般的交換手段の所有者として、社会がこの代表物と引き換えに供給しなければならないすべてのものに対して〔いる〕。」（マルクスの『反省』(Reflection)と題する草稿。<sup>(2)</sup>このように階級と身分における「個人」の包摂のされ方の相異は、交換の性格によって説明されているのである。いずれにせよ、この記述だけから階級への個人の包摂と身分への個人の包摂との差異を述べることは困難である。

そこで本稿では、階級への個人の包摂と身分への個人の包摂の差異を解明する作業の前提として、マルクス自身が「階級」概念を「身分」概念と区別して使うようになってくる過程、すなわち1842年の

『ライン新聞』に執筆した「木材窃盗取締法にかんする討論」についての論稿から、44年の『独仏年誌』所収論文「ヘーゲル法哲学批判序説」を経て、45～46年に執筆された『ドイツ・イデオロギー』に至る過程に注目して、<sup>(3)</sup>初期マルクスにおける階級概念の形成過程に関する若干の私見を述べたい。その意味では、本稿はマルクスの階級概念に関するきわめて限られた、ささやかな作業にすぎない。

## 2.

ところで、マルクス自身が「階級」と「身分」との区別をはじめて明らかにしたと言われる「ヘーゲル法哲学批判序説」と、それが発表された1844年という年は、マルクスの思想形成史のうえで特別な意味を持ってとらえられている。例えばレーニンは、「1841年に書かれたものに、エピクロスの哲学についてのマルクスの学位論文がある。この学位論文では、マルクスはまだまったくヘーゲル学派の観念論の立場に立っている。1842年に書いたものに、『ライン新聞』（ケルン）へのマルクスの諸論文、とくに出版の自由についての、ついで木材窃盗取締法についての第六回ライン州議会の討論の批判、また政治を神学から解放せよという主張などがある。ここではマルクスの観念論から唯物論への、また革命的民主主義から共産主義への移行が現れている。1844年には、パリで、マルクスとアーノルド・ルーゲの編集によって『独仏年誌』が発行せられたが、〔前述の〕移行はここで最終的に完成されている。とくに注目に値いするのは、マルクスの論文『ヘーゲル法哲学批判序説』と『ユダヤ人問題によせて』である」（レーニン『カール・マルクス』、全集第21巻 p.68）と述べている。つまり、1844年はマルクスの観念論から唯物論への、また革命的民主主義から共産主義への移行が完成した年であり、『序説』<sup>(4)</sup>はそれを決定づけた論文であった。したがって、マルクスによる「階級」と「身分」との区別に至る過程は、また同時にマルクスの共産主義思想の成立の過程でもあることになる。このマルクスの思想の発展過程のなかで、階級概念の形成過程が把握されなければならない。

エピクロスの哲学についての学位論文では、まだヘーゲル左派の観念論的立場にたっていたマルクスは、その後の『ライン新聞』に掲載された諸論稿（とりわけ第六回ライン州議会の議事についての「第一論文・出版の自由と州議会議事の公表についての討論」と「第三論文・木材窃盗取締法にかんする討論」の二つの論文、および「モーゼル通信員の弁護」）の執筆を通じて、観念論から唯物論への転換の開始と、革命的民主主義から共産主義への移行が認められると言われている。事実、後年マルクスはエンゲルスに、次のように語ったと伝えられている。「木材窃盗取締法を研究し、モーゼル農民の状態をしらべたことが動機となって、私は、純然たる政治から経済的諸関係の研究に、したがって社会主義に<sup>(5)</sup>すすんだ」。これらの論稿において、「政治的にも社会的にもなにもものもたぬ貧しい大衆」・「無産で、根源的な（エレメンタリッシュ）最下層の大衆」の窮状を分析し、この大衆の生活と権利とを公然と擁護することによって、マルクス自身の思想が少なからぬ影響を受けたであろうことは想像にかたくな<sup>(5)</sup>い。こうした現実の大衆の生活に根ざした諸問題（「第三論文・木材窃盗取締法にかんする討論」では民衆が枯枝を集める権利の問題）に取り組む中で、マルクスが、州議会に代表される「支配階級」の

つくる「法律のうその犠牲」となる「貧民階級」という関係を発見し、はじめて自身の用語として「階級」という言葉を使用している点に注目する必要がある。

しかし、この『第三論文』でマルクスが使用している「階級」概念は、貧富の区別を前提として私的所有にかかわらせた把握にもとづく、素朴な理解の域を越えていない。この「階級」は、まだ搾取関係を内包していないものである。したがって、「貧民階級」は「支配階級」に対抗しうる人間集団ではなく、依然としてその犠牲となる「貧民」にすぎない。「階級」は、「身分」や貧富の区別の延長上の諸概念とともに、明確な区別もなしに使われている。例えば、「支配階級」に該当する人々を「特権者」・「特権身分」・「身分あるもの」・「財産所有者」・「富者」と呼ぶ一方、「貧民階級」も「政治的にも社会的にもなにものもたぬ貧しい大衆」・「無産で、根源的な、最下層の大衆」・「身分なきもの」・「貧しい人々」・「貧者」・「貧民」などと言い換えている。

このように『ライン新聞』の諸論稿に見られた1840年代のドイツの現状の分析は、マルクスを現状に関するひとつの重要な認識に到達させた。「ドイツ国民は、自分のこの夢の歴史を自分の現存の状態とひとまとめにして、この現存状態だけではなしに同時にその抽象的な延長をも批判に付さなければならぬ。ドイツ国民の未来は、ただその国家と法の実在的な状態を直接的に否定することだけでも、またその観念的な状態を直接的に完遂することだけでも、かぎられることはできない。なぜなら、ドイツ国民は、その実在的な状態の直接の否定をその観念的な状態のうちにもっており、そしてその観念的な状態の完遂を、近隣国民を観察してもうほとんど重々知りつくしているからである。」(『ヘーゲル哲学批判序説』、全集第1巻p.420)つまり、ドイツの社会状態の二重性であり、あわせてドイツ国民の課題の二重性であった。このような「ドイツの現状(status quo)」の認識をふまえて、マルクスは当面の課題を「それがドイツにかんするものであるというまさにその理由から、さしあたり原物には関係せず、一つの複写であるドイツの国家哲学や法哲学」(『序説』p.416)の批判に限定した。この仕事は、まさにフォイエルバッハが宗教批判・神学批判を通して行なったヘーゲル哲学の批判を、さらに徹底させ発展させるものであった。これによってマルクスは、観念論から唯物論への、革命的民主主義から共産主義への移行を完了したと言われている。

『序説』では、階級概念の点でも大きな飛躍が見られる。それは、プロレタリアートの発見である。「それではドイツの解放の積極的な可能性はどこにあるのか? 解答。それはラディカルな鎖につながれた一つの階級の形成のうちにある。市民社会のどんな階級でもないような市民社会の一階級、あらゆる身分の解消であるような一身分、……そして結局、社会のあらゆる領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のあらゆる領域を解放することなしには、自分を解放することのできない一領域、ひとことといえば、人間の完全な喪失であり、したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる領域、こうした一つの領域の形成のうちにあるのである。社会のこうした解消をある特殊な身分として体現したもの、それがプロレタリアートである。」(『序説』p.427)まさに、ドイツの解放の担い手としてのプロレタリアートを見つけたことによって、マルクスの階級概念はより具

体的で明確なものとなった。「プロレタリアート」は、もはや「支配階級」の犠牲となるばかりの「貧民階級」とは異なり、「ブルジョア」に対する闘争を行なう階級であり、この二つの階級は対抗し合うものとしてとらえられている。この階級概念の具体化と階級闘争の把握とによって、マルクスの「階級」概念は「身分」概念と実質的に区別されたと考えられる。<sup>(6)</sup> 事実、マルクスはそれに続く文で、「プロレタリアートは突然やってきた産業の運動をとおして、ようやくドイツにとって生成しはじめている。なぜなら、自然生的に生まれでた貧困ではなくて人為的に作りだされた貧困が、社会の重圧によって機械的におし下げられた大衆ではなくて社会の急激な解体とりわけ中間身分の解体から出現する大衆が、プロレタリアートを形成するからである。もっとも、自然生的な貧困やキリスト教的＝ゲルマン的な農奴制（ライプハイゲンシャフト）もだんだんこの列にくわわるのは自明のことであるが。」（『序説』p.427）と述べることによって、『ドイツ・イデオロギー』で展開される諸階級や諸身分の歴史的発展につながるイメージをすでにもっていた。

### 3.

『ドイツ・イデオロギー』（とりわけ、その第一巻第一篇）は、歴史についての唯物論的な見方・捉え方の基本的枠組みを、それとしてはじめて明示的に開陳した文献であると言われている。<sup>(7)</sup> しかし、『ドイツ・イデオロギー』（以下『ド・イデ』と略記する）の原稿の筆蹟の大部分がエンゲルスのものであることや、マンチェスター時代のエンゲルスの「物象化論」視座からの史観を引き継いでいることなどから、これをエンゲルス「主導」による「物象化論」視座に立つ歴史観としての唯物史観の確立を示す文献と見る見解がある。<sup>(8)</sup> 他方、『ド・イデ』に見られる①「人間的」＝「類的」活動の本質や、それが特定の条件、特定の歴史段階においてうけとる形態への着目、②当の活動の本質や形態が、「人間」そのもの、人間の存在様式にとって有する意義についての洞察、③当の活動の本質や形態との密接な連関において、それと表裏一体のものとして、「社会関係」のあり方を検討するとき発想、ならびにそうした視座から歴史の発展段階を整理し、「共産主義」を展望するとき発想は、パリ時代のマルクスの「人間」と「歴史」・「共産主義」の捉え方に連なるものであり、『ド・イデ』以前のエンゲルスに<sup>(9)</sup>は希薄なものであるとして、マルクスこそが「主導性」を発揮したという見解もある。このように、『ド・イデ』の構想をめぐってマルクスとエンゲルスのいずれが「主導」したのかという見解の対立はあるが、『ド・イデ』そのものを両者の共著として公表しようと準備しており、すでにこの執筆までに両者の交流がかなりすすんでいたという事実を考えれば、『ド・イデ』で明示された唯物史観の基本的枠組みを両者の思想の協同の産物と見る限りで誤りはないであろう。その意味では、ここで提示された枠組みは、明らかに初期マルクスの共産主義思想・唯物論の延長線上に位置づくものである。

ところで、「階級」概念の形成にかかわって、『ド・イデ』には注目すべき三つの特徴がある。第一には、「所有形態」の発展にそくして、諸階級や諸身分の歴史的発展をあとづけていることである。

「部族所有」→「古代的共同体所有および国家所有」→「封建的または身分的所有」→「マニファクチュア財産」→「産業資本」→「共産主義」へと発展する所有諸形態に大まかに対応して、「階級」・「身分」の具体的諸相が語られている。また第二には、本論稿の課題である、「階級」と「身分」との区別が明示されていることである。例えば、「ブルジョアジーは、それが階級であってもはや身分ではないという理由からしても、いやおうなしに、もはや地方的ではなく全国的な規模で組織され、その平均的利益になにか普遍的な形態を与えざるをえない。」（『ド・イデ』、全集第3巻p.58）などの表現に見られる。しかし、先の『序説』におけるプロレタリアートの発見と同様に、この「階級」と「身分」との区別は「階級一般」・「身分一般」としてではなく、ドイツの現状の鋭い分析の中から生まれたものである。「今日、国家の独立性がわずかになお見られるところは、身分が階級にまですっかり発展しきっていないような国々のみであり、もっとすすんだ国々ではかたづけられている諸身分がまだなんらかの役割を演じていて寄合世帯のような状態が存在し、したがって、そこでは人口のどの部分も爾余の諸部分を支配するまでにはいたりえないような国々のみである。ことにドイツがそうである。」（『ド・イデ』p.58）という叙述に、そのことが明確に示されている。また、『ド・イデ』では「階級」および「身分」そのものを定義づけているわけではないが、中世の都市における資本について「この資本は、……所有者の特定の労働とじかにつながった、それとはまったく切っても切れぬ、そしてそのかぎり身分的な、資本であった」（『ド・イデ』p.49）と述べていることなどから、前述の『反省』で見た身分における特定の分業への固定性などをすでに意識して「身分」概念を使っていることが類推される。

そして、第三の特徴は「プロレタリアート」と「ブルジョアジー」に代表される「階級」間の関係を、単に対抗し合うものから、歴史の発展の中で矛盾し合うものとして、さらに階級の内的関係に踏み込んだ概念で理解しているということである。「結局のところ、われわれはこれまで述べてきた歴史の見方からなお次のような諸結論を得る。（一）生産力の発展において或る段階に達すると、そこに出てくる生産力と交通手段は現存の諸関係のもとではただ災いの因となるだけで、なんらの生産力でももはやなく、かえって破壊力（機械装置と貨幣）となり、そしてこのことと関連してそこに、社会のあらゆる重荷を担わなければならないだけでいかなる利益をも享けえない一階級、社会から押し出され、他のあらゆる階級ととことんまで対立せざるをえないところへ追いこまれる一階級が呼び出される。この階級はあらゆる社会成員の過半数を構成するのであり、そして根本的革命の必要にかんする意識、共産主義的意識はこの階級から出てくるのであるが、この意識は当然、他の諸階級のうちにもこの階級の地位をみることによって形成されうる。（二）一定の生産力は一一定の諸条件の枠内でしか用いられえないのであるが、これらの諸条件は社会の或る一定の階級の支配の諸条件なのであって、それが所有階級であるというところから生じるこの階級の社会的な力はその都度の国家形態のうちに実践的観念論的に表現されるのであり、それゆえにどの革命的闘争もこれまで支配してきた一つの階級に鋒先を向ける。（三）あらゆる従来の革命においては、働き方には一指も触れられないままで、ただこの働きの配分を変えること、

労働を他の人々に新しく割り当てることが問題とされたのにたいし、共産主義革命は従来の働き方を槍玉にあげ、労働を除き、そしてあらゆる階級の支配を階級そのものとともに廃止する。なぜならこの革命を成就する階級は、社会のなかでもはやなんら階級という意味をもたず、階級とは認められず、すでに今日の社会の枠内であらゆる階級、あらゆる国籍等々の解消をあらわしているからである。そして

(四)この共産主義的意識の大量産出のためにもまた主義そのものの成就のためにも人間たちが大きく変化することが必要なのであって、このような変化はただなんらかの実践的運動、なんらかの革命のなかでのみおこなわれうる。したがって革命が必要なのは支配階級を倒すにはそれ以外に方法がないからというだけではなく、また倒すほうの階級はただ革命のなかでのみ古い垢をわが身から一掃して、社会を新しくつくりうる力量を身につけうるようになるのだからである。」(『ド・イデ』p.65~66)少し引用が長くなったが、ここにマルクスとエンゲルスが1840年代のなかばに到達しえた歴史観(唯物史観)<sup>(10)</sup>と、それにもとづく階級概念の集約的表現を見出すことができる。つまり、①生産力の発展が現存の諸関係の破壊力となるのにもなって、その社会(近代市民社会)では「いかなる利益をも享けえない一階級」(プロレタリアート)が呼び出され、②現存の諸条件を維持しようとする「これまで支配してきた一つの階級」(ブルジョアジー)との闘争に、他のすべての階級をもまきこむ。そして、③この革命(共産主義革命)を成就する階級(プロレタリアート)は、従来の働き方(労働)と階級そのものを廃止するために、④「なんらかの実践的運動、なんらかの革命」を必要とする。この階級概念こそ、生産諸力の発展と生産関係(所有関係)との矛盾を前提とした、近代市民社会におけるプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立の特質と、その克服の道筋を明らかにした、まさに史的唯物論による階級把握の原型と言える。

#### 4.

1844~47年までの時期は、マルクスが『独仏年誌』を創刊したのちに、マルクスの経済学研究の出発点である『経済学・哲学手稿』の作成、エンゲルスとの最初の共著『聖家族』の執筆・公刊、さらに『ドイツ・イデオロギー』の執筆を経て、ブルードン批判である『哲学の貧困』の刊行、「賃労働と資本」に関する講演、「共産主義者同盟」の綱領としての『共産党宣言』の起草に至る、まさにマルクス主義の「シュトルム・ウント・ドラングの時代」であったと言われている<sup>(11)</sup>。事実、この間にマルクスとエンゲルスの階級概念はいっそう前進している。それは主に、『ド・イデ』で見られた階級闘争の視点がよりいっそう深められ、これにもなって階級概念が深化したことによる。しかし、本稿ではこの最も豊かな宝の山を目前にして、この『ド・イデ』の検討で一度筆を置かざるをえない。それは、本稿の課題が当面「階級」と「身分」との概念上の区別に至る過程を追おうとしたためと、そして何より筆者の力量不足によるところが大きい。

そこで、ここでもう一度、本稿の課題にそくして所感をまとめてみたい。第2項の冒頭で述べたように1842~46年のこの時期は、マルクス自身が観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義へ転

換し、さらにその理論的武器としての史的唯物論の基本的な枠組みを確立した時期である。そしてこのようなマルクスの変化は、まさに「ドイツの現状」を正面から捉え、それを具体的・実践的に分析する中から生まれてきたものであると思われる。「階級」と「身分」との区別も、こうした過程ですすめられた「階級」概念そのものの深化の一側面にすぎない。つまり、「階級」概念は、「ドイツの現状」の分析を通して、『第三論文』における貧富・所有一無所有の間での犠牲の関係から、『序説』での「プロレタリアート」の発見と階級の対抗関係の把握へ、更に『ド・イデ』における史的唯物論の視座に立った階級矛盾の把握へと深化しており、これに対応して「階級」と「身分」との区別が明確となっているのである。その意味で、「階級」と「身分」との区別は、すぐれてマルクスの「ドイツの現状」に対する認識の深まりと同時なものと考えられることができるであろう。

「階級」と「身分」との区別は、「階級」概念を理解する上でのまさに出発点にすぎない。最後に検討を試みた『ド・イデ』における階級概念は、筆者の指摘よりもはるかに豊かな内容を含んでいる。その一例として、筆者が冒頭で問題にした「特定の階級のもとへの個人の包摂」（『ド・イデ』p.71）の問題や、更にこれと関連して「人格的個人の階級的個人にたいする区別」（p.72）の問題がある。そして、とりわけ重要なことは、『ド・イデ』の直接の理論的基礎となった『経済学・哲学手稿』に関する検討を欠いているということである。これらの問題を含めて、後日改めて「階級」概念の形成に関する論究ができれば、と本稿の不備を謝して筆を置きたい。

## 註

- (1) レーニンのこの「階級」規定を引用しているものとして、例えば、田口富久治・佐々木一郎・加茂利男著『政治の科学』p.27 青木書店がある。
- (2) 石井伸男「個人と歴史」（中村行秀・高田純・太田直道・石井伸男著『現代のための哲学Ⅲ人間』青木書店所収）p.238の注(7)で紹介されている。
- (3) 服部文男「階級および階級闘争」（服部著『マルクス主義の発展』青木書店所収）によれば、「木材窃盗取締法にかんする討論」（1842年）はマルクス自身の用語として「階級」という言葉がはじめて登場する論文であり、また「ヘーゲル法哲学批判序説」（1844年）はマルクスによって「身分」と「階級」との区別と関連がはじめて明らかにされた論文であり、更に『ドイツ・イデオロギー』（1845～46年）では諸階級や諸身分の歴史的発展をあとづけながら、近代市民社会におけるブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の特質が明らかにされた論文、と指摘されている。
- (4) この1844年をいっそう深い意味で、初期マルクスの思想における一つの転換点と位置づける見解がある。例えば、服部文男氏は、レーニンが生前に目にすることのできなかつた『経済学・哲学手稿』（1844年）の意義を重視し、経済学研究の出発点としての性格を強調している（服部文男「初期マルクスにおける共産主義思想の成立について」同著『マルクス主義の形成』青木書店所収）

p.134～135)。

- (5) このマルクスの言葉は、『マルクス・エンゲルス全集 第1巻』の「第一巻序文」p.XVIIに紹介されている。
- (6) A・ギデンスは同じ引用箇所から、マルクスが依然として「階級」と「身分」と混同していたと評価しているが、服部文男氏はこれに対して「マルクスのヘーゲル批判に特有の視角を無視して、文字面のみにとらわれた皮相的な理解である」と批判している。(服部, 前掲論文「階級および階級闘争」p.268)
- (7) 中川弘「唯物論的歴史観の確立」(服部文男編『講座史的唯物論と現代2 理論構造と基本概念』青木書店所収) p.32
- (8) この「エンゲルス主導説」の代表的な論者として広松渉氏がいる。
- (9) 中川弘, 前掲論文 p.74
- (10) 服部文男「総論」(同編『講座史的唯物論と現代2』) p.6～7では、マルクスの史的唯物論の「定式」について、マルクス自身の「政治経済学」研究の成果をうけて、『ドイツ・イデオロギー』に反映された1840年代なかばで到達しえた新たな歴史観を、57～58年の草稿『経済学批判要綱』の研究成果をふまえて、59年の時点の理論水準によって補訂し整備したのが『経済学批判』の「序言」であるとしている。
- (11) 服部文男「1840年代におけるマルクス主義の普及過程」(同著『マルクス主義の発展』所収) p.4